

「日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。(Since 2006)

目次	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ.....	1
➤ JRRN 会員寄稿記事.....	3
➤ 会議・イベント案内 & 冊子等の紹介.....	12

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

写真集「桜のある水辺風景 2019」を発行しました！

5 月末に締め切りを迎えた今年の「桜のある水辺風景」ですが、およそ 1 か月の編集期間を経て、この度、写真集「桜のある水辺風景 2019」を発行しました。

皆様からご応募いただいた写真とコメントについてはすべて掲載しています。また、作品以外に、今年の桜にまつわるデータや撮影箇所に関するデータなども併せてとりまとめました。

これから夏本番を迎えるところではありますが、季節の振り返りがてら、是非ご覧いただければ幸いです。

◆発行情報

- ・名 称：桜のある水辺風景 2019
- ・発行日：2019年7月1日（月）
- ・編集・発行：日本河川・流域ネットワーク（JRRN）

◆公開情報

- ・公開 URL：<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/242>
- ・Facebook：<https://www.facebook.com/sakuramizube/>
- ・Twitter：<https://twitter.com/sakuranomizube>

(JRRN 事務局・阿部充)



図1 - 写真集「桜のある水辺風景 2019」表紙

JRRN 事務局からのお知らせ (2) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクトー「水辺の小さな自然再生事例集 II (仮称)」を制作します



「水辺の小さな自然再生事例集」表紙 (2015年3月発行)

JRRN による水辺の小さな自然再生の全国普及に向けた取り組みは、2015年3月に発行した「できることから始めよう～水辺の小さな自然再生事例集」の制作から始まりました。その後、事例集制作メンバーで構成される「小さな自然再生」研究会の協力を得ながら、また資金面では公益財団法人河川財団の河川基金の助成を頂きながら、2015年度には「小さな自然再生」に関わるポータルサイトとしてのホームページ公開、2016年度には広報用リーフレット制作、2017年度には3分間の小さな自然再生コンセプトムービーの公開、そして昨年度はこれまで収集した全国の事例を紹介したデータベースを公開し、小さな自然再生の普及に向けた支援ツールの整備に努めてまいりました。(図1参照)。

活動開始から6年目となる今年度は、これまで5年間の普及活動を通じて繋がった全国の水辺の小さな自然再生の担い手の皆様の協力を得ながら、右記の企画で事例集の第二弾となる「水辺の小さな自然再生事例集 II (仮称)」を制作致します。

できることから始めよう 水辺の小さな自然再生事例集 II 制作企画 (案)

■目的:

小さな自然再生に必要な基礎知識や全国事例紹介を通じて、身近な水辺をフィールドに、様々な主体と協働し多種多様な生きものが生育・生息できる環境づくりを主体的に担う人材を育成する。

■制作手順:

- ✓ 過年度制作の事例データベースを活用し、小さな自然再生の更なる普及の観点から全国の事例を評価・分析し、事例集で紹介する項目を検討。(事例テンプレートの確定)
- ✓ 全国の小さな自然再生の担い手へ事例執筆の協力を公募。
- ✓ インロページや特集ページの企画・制作。
- ✓ 応募事例の編集及び事例集制作。
- ✓ 全国への普及(印刷版及び電子版)。

■編著: 「小さな自然再生」研究会

■発行: 日本河川・流域再生ネットワーク

※(公財)河川財団による河川基金の助成を受けて実施します。

今年度制作する事例集 II では、技術体系における小さな自然再生の位置づけを分かりやすく解説し、河川整備計画等において小さな自然再生を実装していくためのヒントを紹介できればと思います。更には、水辺を活かした地域づくりの視点から、小さな自然再生の教育的価値や専門性強化に向けた活用方法についても、先進事例を通じて読者にお届けしていくことを目指してまいります。

7月後半～8月頃には事例集で紹介する全国の取組みを募集しますので、皆様のご協力をよろしくお願い致します。

(JRRN 事務局・和田彰)



図2-水辺の小さな自然再生の普及に向けた支援ツールの整備



安倍川

撮影：2019年4月14日（静岡市 安倍川）

『川と人』見聞録

『素晴らしき川の世界へ！』～Vol.1 安倍川～

寄稿者：坂本貴啓・川畑遼介・能登江梨香・中前千佳（『川と人』川巡りの会・JRRN 会員）

『川と人』見聞録
素晴らしき川の世界へ

旅した川の数だけ川の世界は広がっていく。『川と人』を訪ね歩いた川巡りの記録。
さあ、あなたも川へ出かけよう！素晴らしき川の世界へようこそ！

今回の川旅（2019年4月13日-14日）

安倍川の概要

流路延長：51 km
流域面積：567 km²
流域人口：約 17 万人
(洪水)基本高水流量（手越地点）：5500m³/s
水源：大谷嶺（標高 2000m）
河口：駿河湾

今回のみどころ

【1日目】

静岡駅スタート

- ① 安倍川河口
- ② 安倍川の河床
- ③ 大谷崩れ
- ④ コンヤの里さくら園

【2日目】

- ⑤ 安倍川親水公園
- ⑥ 霞堤
- ⑦ うしづま水辺の楽校
- ⑧ 桜堤の風景
- ⑨ 朝比奈川（二級水系）
- ⑩ 流域界（朝比奈川と藁科川（安倍川水系））
- ⑪ 藁科川・安倍川合流点
- ⑫ 安倍川餅と東海道



図1 安倍川流域図（国土交通省中部地方整備局より引用）

1. はじめに

白川研究室時代のOB・OGらを中心につくる「川と人」川巡りの会というものが 있습니다。在学中、私達は白川直樹先生と一緒に数々の川を一定のルールに基づいて巡り、「白川直樹の河川観」に触れてきたと思っています。学んだ河川観は社会人になっても、日常のふとした時に意識することがあり、私達の大きな財産になっています。2017年頃から不定期にOB・OGらの有志を中心に川巡り活動をスタートさせ、これまで、色んな川を巡ってきました。様々な川を巡る中で、その時々素晴らしい川と人に会い、毎回大きな感動があります。その記憶を記録に残したく、書いてみました。今回は静岡県安倍川を旅して、素晴らしい川の世界へ飛び込んでみました。

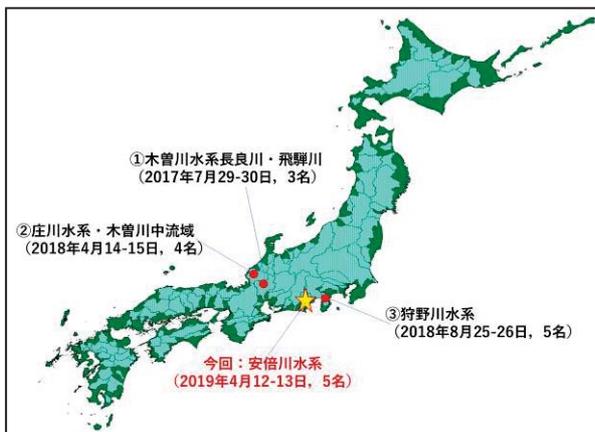


図-1 これまでの『川と人』川巡り会開催の履歴

2. 安倍川の河口（右岸 0km 付近）

2 日間に渡る川巡りのスタート、静岡駅前で車を借りた我々はまず河口に向かった。この安倍川の見どころのメインスポット、河口閉塞を見るためだ。

堤防を登りきると、一目でそれと分かる河口閉塞、そしてその奥には青々と光る駿河湾が目映った。風力発電用プロペラが河口左岸側に立っており、普段は風が強いのだろうが、この日はプロペラは全く動いておらず比較的穏やかな日なのだろう。浜辺にはのんびりと寝そべる男性の側から糸が伸びており、空を見上げると優雅に泳ぐ真っ白な凧、そして一筋の飛行機雲が、春の柔らかな青空に映える。

山側を振り返ると遠くに頂きに雪を残した富士山が白くそびえ立ち、青空と富士山の境界がくっ

きりと見えた。駿河湾の青い輝きと青空、そして富士山の雪、飛行機雲、凧と偶然にも青と白で統一された光景は、旅の期待を膨らませるのに充分であった。

この河口閉塞とはその名の通り、砂によって河口が閉塞される様子のことである。この日は完全には閉塞されていなかったが、水が少ない日は完全に閉塞されることもあるという。安倍川は周辺の地質の性質上土砂が崩れやすく、土砂供給が多いためこのような閉塞が起こるのだそうだ。閉塞によって河口は汽水域のプールようになっており、カモメの群れやアオサギが羽を休めるにはちょうどいい場所となっていた。



写真1 安倍川河口

(かわはた)

3. 安倍川の河床（右岸 0.5km 付近）

安倍川下流域は水が非常に少なく、河床の大部分が露出している。東海道新幹線側の駿河湾大橋地点では400m程度の広い河床幅を持ちながらも、私の感覚だとこの日は水が流れる幅が20mも無かったように思う。

河床には水が流れた跡が残されており、天然の枯山水のようである。ここに水が流れる時は、川はどのような景色なのだろうかと思いを巡らせるのも面白い。この川は下流域においても河床勾配が1/250と急であり、河口から水源までわずか約55km(車で1時間半)というコンパクトな点が特徴的である。海と山が近いため中流域がほとんどない。駿河大橋から上流に向けて車を走らせると、あっと言う間に急峻な山々が目の前に迫ってきた。

山間部に入ると両側はもはや山というより壁のように急勾配の山腹に挟まれた道を進んでいるようである。至る所に生々しい土砂崩れの跡が見え、思わず体を強張らせてしまった。河口閉塞で土砂

供給が多いというのうなづける景色である。山腹は基本的にスギが植わっているが、ところどころ山桜が点在して咲いており、緑と桜色が織りなす模様が何とも綺麗であった。恐らくこの山桜は戦後のスギ植樹の際に伐採されたのだろうが、ひっそりと土の中で命を繋ぎ、土砂崩れが起こりスギが無くなった場所に再び芽吹いたのだろう。この山はスギではなく自分達の場所だと、山桜が私達人間に訴えているようだ。一方、山道沿いの家には、裏山が茶畑になっている世帯が沢山見られた。他の場所よりは勾配が緩いとはいえ、たちまち豪雨が起こればいつでも山が崩れてもおかしくない。そんな厳しい自然にも負けず、茶栽培の伝統を守り次世代に繋げたいという逞しさを感じた。自然と人間、それぞれが脈々と次世代へのバトンを繋げようと必死で生きている様を目にしながら、上流へと車を進めた。

(かわはた)

4. 大谷崩れ (左岸 53km 付近)

安倍川河口から流路延長 53 kmの最上流端を目指して遡る。だんだんと道が狭くなっていき、目指す崩壊地が近付いていることが分かる。大谷崩れは日本三大崩れと呼ばれる大規模崩壊地形で、宝永4年(1707年)の宝永地震によってできたとされている。鷲山崩れ(1858年、富山県)、稗田山崩れ(1911年、長野県)とともに日本三大崩れと呼ばれている。大谷崩れは幸田露伴の娘である、幸田文が『崩れ』(講談社、1994年)を72歳の時にエッセイとしてつづっており、大谷崩れの迫力を語っている。

現地に着くと、まだ山深いその一帯には4月中旬というのに雪が残っていた。むき出しの斜面がこちらを睨んでいる威厳すら感じる。よく耳を澄ますと、今なお、あちこちの斜面から石が崩落していく音が聞こえる。

我々が立っているこの空間は、静寂なる支配というべきか。崩壊地のふもとには幸田文の碑文があり、本の一節が刻まれ、現地に建立されていた。

我々は、今なお静かに崩壊を続ける斜面を仰ぎ、安倍川は土砂生産が多い川であることを改めて理解し、「崩れの川」とであると実感したのだった。

崩壊は憚ることなく

その陽その風のもとに、

皮のむけ崩れた肌をさらして、

凝然と、こちら向きに静まっていた。

無惨であり、近づきたい畏怖があり、

しかもいうにいわれぬ悲愁感が沈澱していた。

(幸田文「崩れ」 碑文より)



写真2 大谷崩れ麓にある文学碑

(さかもと)

5. コンヤの里さくら園 (左岸 50km 付近)

安倍川を訪れたのは4月の半ばであった満開の時期は過ぎ去っていたが、幸い各所でまだ桜は咲いていた。

河川敷に桜並木が続いているところ及び桜園でドローンを飛ばし、上空から桜並木を撮影した。伏流している安倍川の荒野のようにも見える景色に対比して、桜がとても映えていた。桜園の上空からは絨毯のように一面に桜が広がった景色が見え、まるで桃源郷のような幻想的な美しさであった。



写真3 安倍川上流域とコンヤ桜園

(なかまえ)

6. 安倍川親水公園（左岸5km付近）

コンビニで朝ごはん買い、安倍川親水公園の高水敷で川を見ながら朝食。大学時代からゼミ合宿の時は白川先生とよくやっていた。高水敷の護岸から川を眺めるが、高水敷と川の落差は1mもなく、一帯が礫でうまっけて河床が浅い。水もちよちよちわづか流れ、あとは伏流している。その証拠に犬の散歩コースで低水路河床を歩いている人がいる。いざ出水となると河道に大水が押し寄せるが、普段はこんな風景を見せる。広い高水敷には駐車場、親水水路、運動場などが整備されていて、朝9時頃から多くの人でにぎわっている。



写真4 安倍川親水公園
(さかもと)

7. 安倍川と霞堤

安倍川沿いの堤防を車で走っていると、不自然な分岐があった。

「霞堤だ！」川系男子が真っ先に気づいた。私たちは霞堤の上を通っていたのだ。

霞堤とは、川に対して斜めに築かれた堤防であり、洪水の水を逃がし、被害を最小限に押さえようとした先人たちの知恵である。

実際に通ってみると、その独特な配置がよくわかった。教科書で見た構造を自分で確かめることのできた感動で、夢中になって車窓からの景色を見た。

航空写真から霞堤の位置を確認すると、駿府城を守るためにこのような霞堤の入れ方をしたのではないかとさえ思う。

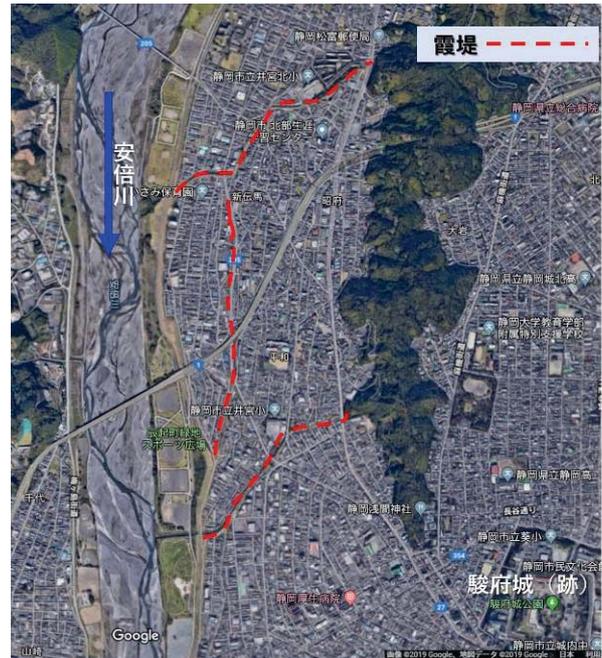


写真5 安倍川と霞堤
(なかまえ)

8. うしづま水辺の楽校（左岸16km付近）

国土交通省の「子どもの水辺」の整備の一環でできた「うしづま水辺の楽校」がある。この場所は7月中旬から8月末頃まで河川敷の河川プールが開放される。ここを管理しているのは地元の有志でつくる「うしづま水辺の楽校世話人会」という市民団体で、安全管理や維持管理などを行っている。

実はこの団体、坂本が大学院で時代、全国河川市民団体調査をしていた時、中部地方調査で訪れた団体である（2014年2月17日、静岡河川事務所にて）。夏の間、関東からも1000人規模のが来て、とにかく賑わう場所だと聞いていた。当時は現地まで行けなかったのが、今回初めて訪問した。

河川プールはまだシーズンオフだが、堤防天端、堤防斜面、高水敷を一帯として親水空間として整備している。高水敷を公園の下流端まで歩き、堤防を通過して折り返すこの道は気持ちがいい。

参考：川系男子の『川と人』巡り No. 22, p. 2
<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1557.html>



写真6 うしづま水辺の楽校
(さかもと)

9. 安倍川と桜堤の風景 (右岸 14km 付近)

右岸 14 km 付近には堤防沿いに桜並木があり、堤防の上をゆっくり散策することができた。空撮写真では、安倍川の河道、堤防、堤内地 (住宅地)、山を横断的に確認することができ、改めて安倍川のスケールの大きさを感じた (写真は表紙)。

(さかもと)

10. 安倍川と茶畑

安倍川沿いを散策しながら少し山のほうに目を向けると、急な斜面いっぱい、深い緑の茶畑が広がる風景がいくつも見られた。静岡茶のはじまりと言われているこの流域は、水のきれいさに加え山の斜面が川霧に包まれることで、お茶の栽培に適した環境。やわらかい味わいの「静岡本山茶」は、徳川家康にも愛飲されていたそう。

山間部にて裏山が茶畑になっている世帯の近くを通り抜けたことは前述のとおりだが、安倍川の広大な河床とともに見る茶畑は、この流域の豊かな自然と歴史を一段と象徴しているようであった。



写真7 朝比奈川流域の茶畑
(のと)

11. 朝比奈川 (流域外) と藁科川

安倍川の右支川に藁科川がある。安倍川の下流で合流する大きな支川である。ちょっと流域を飛び出し隣の流域を覗いてみるのも川巡りの醍醐味だ。朝比奈川流域の岡部町朝比奈地区の静岡茶は京都の宇治茶、福岡の八女茶と並ぶ玉露の三大山地として有名である。道の駅「茶の華亭」でお昼休憩し、茶畑の上から朝比奈川を眺めて小休止。

その後、朝比奈川をずっと遡り峠道へ。朝比奈川が消えたあたりで峠の頂上付近に差し掛かる。ここが水分かつ分水嶺。朝比奈川 (二級水系) と藁科川 (安倍川水系) の流域界である。峠の頂上付近に車を止め、流域界をその場に身を置いて感じる。とりあえず水を分けるポーズをとってみるのも流域界の楽しみ方の一つかな。

12. 藁科川・安倍川合流点 (右岸 3km 付近)

藁科川を下ってくると安倍川に合流。藁科川はアユ釣りの川として有名だ。合流点付近には名勝、木枯ノ森があり、川を渡らないといけない川中島の神社がある。この木枯ノ森は清少納言の枕草子 (能因本) の一節で「森は木枯の森・・・」と記述されて以来、駿河国の歌枕として数多く和歌に登場する。

人知れず おもひ駿河の国にこそ

身を木枯の森はありけれ
(小野小町)

消えわびぬ うつろう人の 秋の色

身をこがらしの森の下露
(藤原定家)

この時はこの和歌が詠まれた場所とも知らず、ただ対岸から川中島を見ていた。あの時もう一歩行けていれば・・・と思うのも川巡りに再訪意欲をもたらす大事な要素だ。



写真8 藁科川・安倍川の合流点付近（木枯ノ森）
（さかもと）



13. 安倍川餅と東海道（左岸4km付近）

また、河口に向かう途中、東海道が安倍川に架かる付近にて、「安倍川もち」ののぼりがはためく老舗茶屋を何軒か見つけた。

その昔、安倍川の上流には金山があり、金の採掘で栄えていた。

近くを訪れた徳川家康に、茶屋の店主がきな粉餅を献上し、安倍川の砂金をまぶした金粉餅であると紹介したところ、これを気に入った家康が「安倍川餅」と名付けたという一説がある。ほんのり甘いつきたての餅は、東海道、そして安倍川を往来する旅人たちにも親しまれていたことだろう。

私たちも一軒の茶屋に入り、安倍川の歴史とこれからの思いを馳せながら、きな粉と餡の安倍川餅、そして静岡茶をおいしくいただいた。



写真9-10 安倍川・東海道交差にある安倍川餅
（のと）

14. おわりに

今回の安倍川巡りでは土砂供給の盛んな川であると身をもって実感することができた。崩れがものがたる自然の驚異、土砂を運ぶ川の営力どれもダイナミックなものであった。そんな地形の上に安倍川流域独自の産業や暮らしを感じることができたのではないかと思います。



水辺からのメッセージ No.122

岡村幸二 (JRRN 会員)

親子で田植え： 公園の一角に小さな田んぼをつくり 市民の手で田植えから刈り取りまで



撮影：2019年6月（茨城県古河市・古河公方公園）

◆御所沼の前で初夏の風物詩

かつて古河公方の館の周囲に広がっていた御所沼は、食料増産のため水田化された時期もありました。公園の計画にあたり、当時に思いを込めて「ホツケ田」という小さな田んぼがつけられました。

◆どろんこクラブの田んぼづくり

2000年に活動が始まったどろんこクラブ。一年を通じて「ホツケ田」とお付き合いが続きます。田植え、案山子づくり、稲刈り、脱穀、ごはん試食など、米づくりのことを親子で学んでいます。

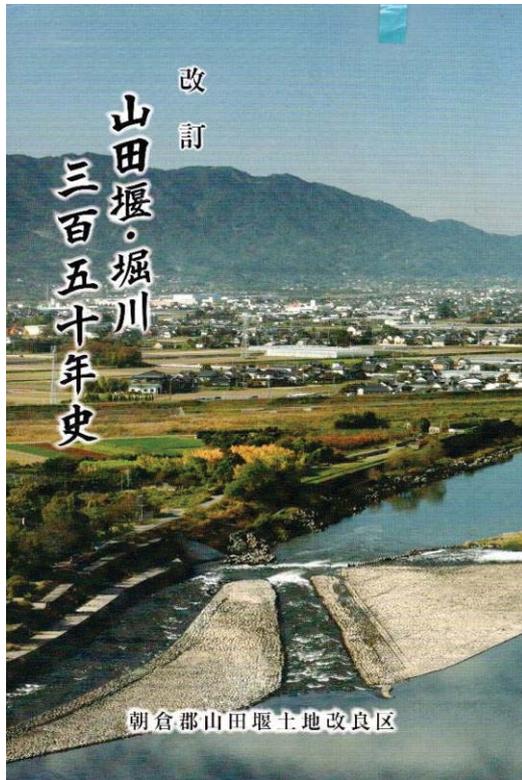
■ 連載『水辺からのメッセージ』のバックナンバーはJRRNホームページ内の以下のページよりご覧いただけます！

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/category/mizube>

河川書の探求(15)

山田堰・堀川とアフガニスタンと中村哲医師

古賀邦雄・古賀河川図書館 (JRRN 会員)



1. 山田堰と堀川

福岡県朝倉市山田に位置する山田堰、その堰から取水する堀川は、1790(寛政 2)年下大庭村(現・朝倉市)の庄屋古賀百工によって改築された。現在も農業用水が送られ、一部の水は、堀川に設置された、三連水車・二連水車から揚水する。

朝倉郡山田堰土地改良区編発行『改訂 山田堰・堀川 三百五十年史』(平成 23 年)に、堰の特徴について、次のように記している。

「石積の斜め堰で、洪水の洗掘を回避し、取水の安定を図るため、取水口の間口を広くとり、河道全体を斜めに堰上げて、水位変動を抑え、土砂の流入を防いでいる。さらに対岸に遊水地を広くとり、自然の地形を巧みに組み合わせた構造となっている。」

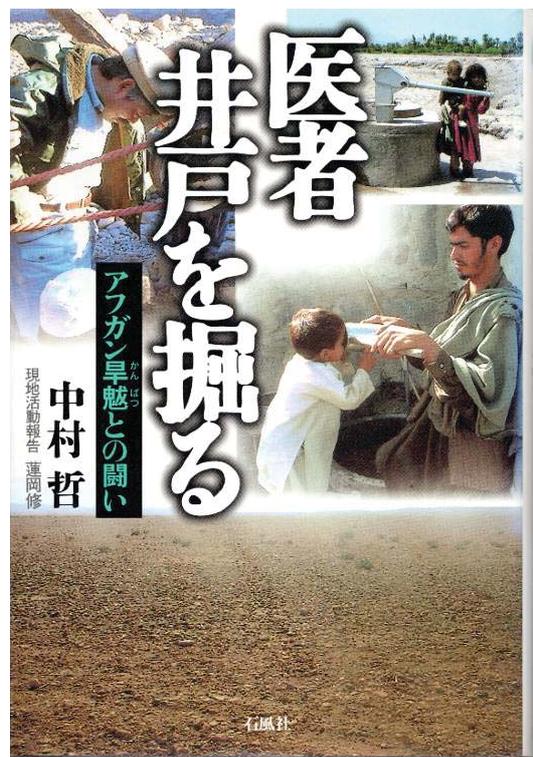
山田堰に佇むと、その河川空間が何とも言えない不思議な世界に満たされてくる。この水利システムは古賀百工の三十年にわたる筑後川の流れの観察によると言われている。

2. 井戸を掘る

戦乱で荒廃したアフガニスタンに灌漑用水造りを目指したベシャワール会の中村哲医師は、この山田堰に何度も訪れ、その

水利システムを学び取った。芥川賞作家火野葦平の甥っ子にあたる中村医師は、医療活動継続しながら、何度も大旱魃に遭遇、診療所で水の大切さを痛感、「とにかく生きておれ、病気はあとで治す」の心意気で、先ず、アフガニスタンの人七百人を指揮して、1,000 基の井戸を掘った。中村哲著『医者 井戸を掘る - アフガン旱魃との闘い』(石風社・2001 年)がある。

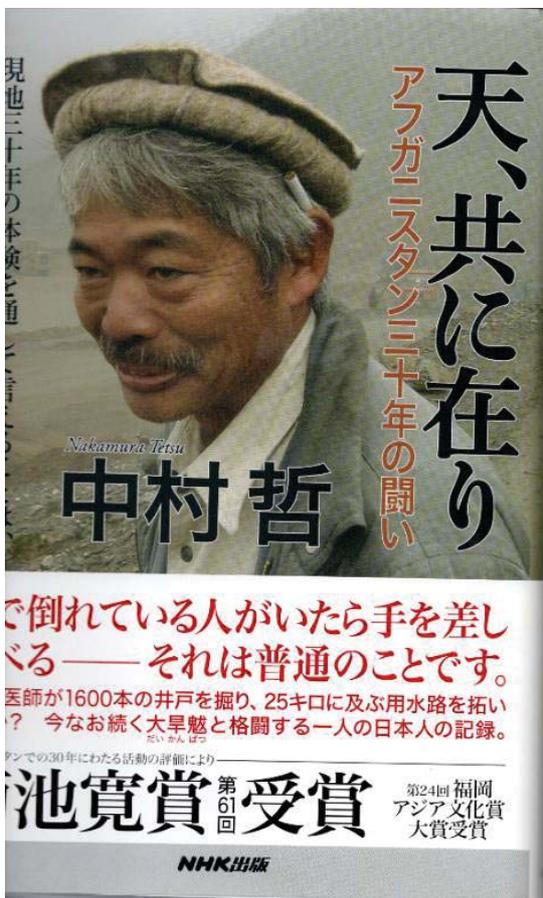
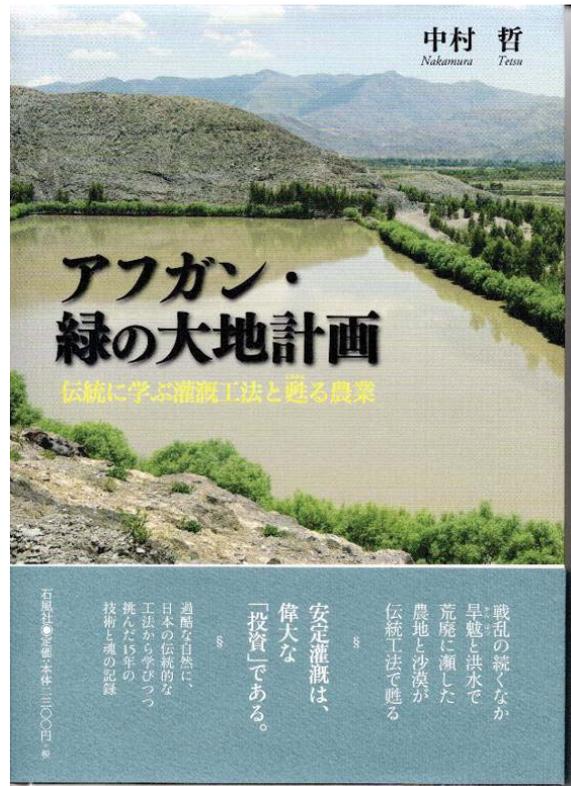
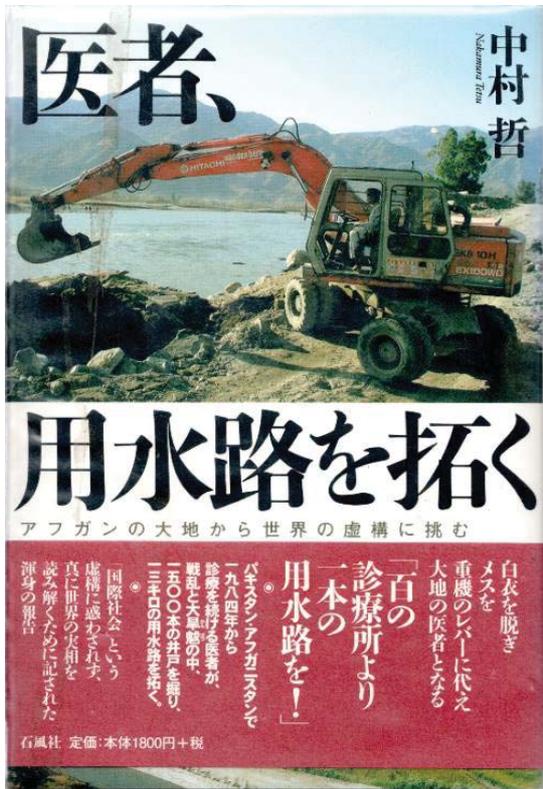
さらに、飢えと渴きは薬では治せない。清潔な飲料水と十分な農業生産があれば、病の多くは救えるとの信念をもって、灌漑用水造りに挑む。



3. 緑の大地計画

アフガニスタンのマリワ用水路取水堰は、山田堰と同じように斜め堰を設置し、取水量は堰板で調節、その下流に沈砂池を設け、用水路の護岸は蛇籠施工(竹や鉄の網に石を積めて川に沈め基礎にする)である。用水路からの水がさらなる灌漑農地を広げている。砂漠地帯が緑に変化した。農産物の小麦などの生産高が向上した。アフガニスタンの人は、最初は誰も完成するとは思っていなかったと言う。人々は水が水路に流れ出したとき、歓喜に包まれた。

中村哲著『医者、用水路を拓くアフガンの大地から世界の虚構に挑む』(石風社・2007年)、同著『天、共に在り—アフガニスタン三十年の闘い』(NHK出版・2013年)、同著『アフガン・緑の大地計画』(石風社・2017年)が刊行されている、



4.おわりに

2015 (平成27)年3月26日～28日アフガニスタンより、ドウラニ農業復興開発大臣が、中村医師と共に山田堰を訪問した。山田堰土地改良区事務所には、古賀百工への感謝をこめて、中村医師の色紙「濁流に沃野夢見る河童かな」が飾られている。古賀百工が築いた山田堰・堀川は二百年以上の時空を超えて、アフガニスタンの民を救っている。

中村医師の夢はまだ終わらない。灌漑用水施設の益々の拡大が進捗している。荒れ野が緑の大地に広がっている。

会議・イベント案内 (2019年7月以降) *Event Information*

(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)

■ 公益社団法人日本水環境学会 第28回市民セミナー：災害・防災の視点。水環境分野から見えること、できること。

- 日時：2019年8月2日(金)
- 主催：公益社団法人日本水環境学会
- 場所：地球環境カレッジホール(東京都世田谷区)及びいであ(株)大阪支社ホール(大阪市住之江区)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2972.html>

■ 清流の郷づくりフォーラム

- 日時：2019年8月9日(金) 13:30~16:00
- 主催：兵庫県
- 場所：香住区中央公民館(兵庫県香美町)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2981.html>

■ 第9回マザーレイクフォーラムびわこミ会議2019 ~びわ湖のこれまで、そしてこれから~

- 日時：2019年8月31日(土) 10:00~16:30
- 主催：マザーレイクフォーラム運営委員会・滋賀県
- 場所：コラボしが21(滋賀県大津市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2949.html>

■ 第27回リバーフロント研究所研究発表会

- 日時：第27回リバーフロント研究所研究発表会
- 主催：公益財団法人リバーフロント研究所
- 場所：日本橋社会教育会館(東京都中央区)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2952.html>

■ 応用生態工学会 第23回大会 公開シンポジウム：ここまで進んだ生態系観測技術の最前線

- 日時：2019年9月29日(日) 午後
- 主催：応用生態工学会
- 場所：広島大学東広島キャンパス 理学研究科E棟 1F E102 講義室(広島県東広島市)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2983.html>

■ 第11回応用生態工学会全国フィールドシンポジウム in 耳川

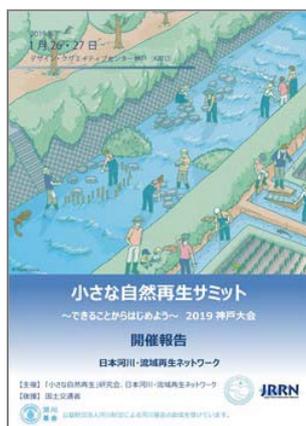
- 日時：2019年11月14日(木)~15日(金)
- 主催：応用生態工学会 普及・連携委員会
- 場所：宮崎県日向市 他

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2970.html>

冊子等の紹介 *Publications*

■ 小さな自然再生サミット~できることから始めよう~ 2019 神戸大会 開催報告 (2019.2 発行)

- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)
- ・発行年月：2019年2月
- ・ページ数：43ページ



2019年1月26日(土)~27日(日)に神戸にて開催しました『小さな自然再生サミット2019神戸大会』の開催成果報告書です。

この開催報告は、サミット参加者とともに学び議論した内容の一部を、当日の写真とともに皆様にご紹介するものです。

■ 「できることから始めよう 水辺の小さな自然再生事例集」(2015.3 発刊)

- ・監修：玉井信行 東京大学名誉教授 / JRRN 顧問
- ・編著：「小さな自然再生」事例集編集委員会
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)
- ・出版年月：2015年3月



本事例集は、小さな自然再生の実践を通じてその技術普及に尽力されている専門家の方々、専門知識の社会への橋渡しの専門家、そして有志の若手研究者や実務者で構成される「小さな自然再生事例集編集委員会」が、小さな自然再生の全国への普及を目的として制作したものです。

■ 上記冊子の入手方法 ※PDF版はこちらから：<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/>

JRRN 会員募集中 JRRN membership

■ JRRN の登録資格 (団体・個人)

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

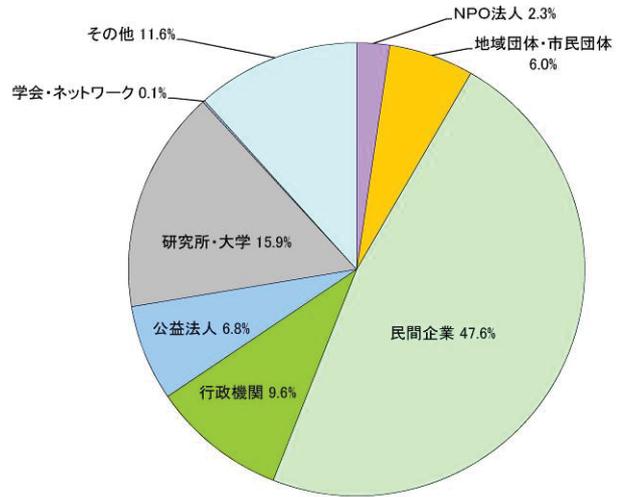
会員登録をされた方々へ様々な「会員特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2019年6月30日時点の個人会員の所属構成
 (個人会員数：797名、団体会員数：60団体)
 ※6月の新規入会数：個人会員1, 団体会員0

JRRN 会員特典一覧表 (団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 NMF 茅場町ビル7階 (公財) リバーフロント研究所 内
 Tel:03-6228-3865 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net
 URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>